トヨタ看護専門学校
２０２３年度　入学試験問題（国語）

全五頁中一頁

受験番号
氏名

一　次の文章を読み、後の問いに答えよ。

「キミたちの一番の仕事は、元気なあいさつよ。ちょっときつかもしれないけど、これもここの現実。社会勉強だと思って、がんばって」
五人は深く考えることなく「はい」の返事をくりかえした。
ちょっときつい。ここの現実。社会勉強。それらの意味するところを、このときはまだ知るよしもなかったのだ。

三階の廊下を、ずんずんと加藤さんが行く。移動式のワゴンをおしているのに、このちゃんが小走りになるほど、その足は速い。
「ちゃかちゃかやってかないとね、いつまでたっても終わんないのよ、この仕事」
このちゃん担当の加藤さんは、三十代なかばくらいの女の人。身のこなしがてきぱきとしていて、はっきりとものを言うところが、バスケ部のキャプテンと少し似ている。
「言っとくけど、わたしたちがまわるのは、ほとんど寝たきりの人たちの居室よ。ドリンクもひとりじゃ飲めないから、サポートが必要」
「わ、たいへんですね」
「序の口、序の口。ほんとにたいへんなのは、入浴のサポートや床ずれのケアよ。けど、そんな仕事のときには子どものボランティアなんて、いたってジャマなだけだから」
「ですよねー、はい」
加藤さんのきつい物言いを、このちゃんは部活のノリでやりすごした。どんなに気むずかしい先輩を相手にしているときでも、こっちが笑顔でいるかぎり、それほどひどいことにはならないものだ。
「こんにちは！　おやつのジュースをおもちしました」
最初の居室に入るときにも、言われたとおりに元気な声をはりあげた。
が、返ってきたのは、ひんやりとした沈黙。窓側と廊下側、ふたつのベッドに横たわっていたのは、このちゃんが想像していた以上に弱弱しい、小さくやせた老人たちだった。
深く落ちくぼんだ四つの瞳は、このちゃんのほうを見むきもしない。
彩りのない白い部屋。
鼻を[a]シゲキする消毒液のような静寂。
びくともしない鉄のような静寂。
「今日はリンゴジュースです。いま、用意しますからね」
この時点で早くも[A]腰が引けていたこのちゃんをしり目に、加藤さんがしゃきしゃきと動きだす。
まずはジュースの紙パックを開け、ふたつのコップへそそぐ。そこに[b]顆粒の添加剤を加え、スプーンでかきまぜる。と、みるみる液体がとろみをおびていく。
「うまくものを飲めないお年よりは、こうしたほうがのどをとおしやすいのよ」
加藤さんはそれをスプーンですくい、廊下側にいるおじいさんの乾いたくちびるへ運んだ。ひと口、もうひと口、またつぎのひと口。無表情のまま口をもごもごさせているおじいさんからは、どんな味なのかも伝わってこない。
「あなたもやってみて」
加藤さんから言われ、このちゃんは緊張しながらも、「はい」と窓側のおじいさんへ歩みよった。
「おじいちゃん、りんごジュースです」
この人はあたしのおじいちゃんだ。そう自分に言いきかせながら、おそるおそる、ゆるいゼリー状のジュースを口へ近づける。
力なく開かれたくちびるに、そっとスプーンをのせた。おじいさんが口を閉じ、のどもとの筋肉をかすかにふるわせる。
よかった。のどをとおったようだ。
「あの、おいしいですか？」
だまっていられず、精一杯の笑顔でこのちゃんは聞いた。
とたん、ぼうっと天井を映していたおじいさんの瞳が、はじめてこのちゃんに焦点をむすんだ。みるみるその目に涙がたまり、つうっと、ひと筋のしずくがしたたり落ちる。
「おじいちゃん？」
あわてて顔をのぞきこんだこのちゃんに、おじいさんは言った。
「とんかつが食いたい」

気の毒だけどしょうがないのだと、部屋を出るなり、加藤さんは言った。
「あのおじいさん、もう歯はないし、腎臓は悪いしで、病人食以外は食べられないの。あげものなんて、とんでもない」
たぶん加藤さんの言うとおりなのだろう。頭ではわかっていても、とんかつが大好物のこのちゃんに、あの涙はせつなすぎた。
あの人はもう二度ととんかつが食べられないのか？
好きなものも食べられないまま、あそこで、寝たきりで生きつづけるのか？
痛ましいのはあのおじいさんだけではなかった。加藤さんについていった方々で、このちゃんは①おなじような境遇のお年よりたちをつぎつぎ前にした。
とろみをつけたジュースですらものどをとおせない人。

このちゃんを孫と思いこんで泣く人。
家族がむかえにこないと怒る人。
これが「ここの現実」ならば、悲しすぎる。そう思いながらも、このちゃんはそれを心の奥に閉じこめ、表面的には笑顔でいつづけた。
きついときほど、よく笑う。それは、このちゃんがいつのまにか身につけたくせのようなものだ。部活の練習中、疲れたときほど「ファイト！」と声をはりあげるように、泣きたいときほど笑うことで自分を支えようとする。
「失礼しました！」
最後まで元気にあいさつをしつづけたこのちゃんに、うけもちの部屋をまわり終えると、加藤さんは初めてねぎらいの言葉をくれた。
「おつかれさま。あなた、タフね。たいがいの子は、とちゅうでぼうっとなっちゃうもんだけど」
その言葉の意味をさとったのは、「ちょっとやすんで」と中宮さんに連れていかれた[c]キュウケイ室で、さきに仕事を終えていた四人と再会したときだ。
卓上のおかしにがっついていた男子ふたりはともかく、女子のふたりはみごとに「ぼうっ」を絵に描いたような顔をしていた。
「相本さん、ゆうかちゃん。どうだった？」
声をかけても、返事がない。千鶴はうつろな目をしたままで、ゆうかはその千鶴のうでをぎゅっとにぎりしめている。
「長生きするの、やめたんだって」
「お母さんが寝たきりになったらどうしようって、こわくなったんだって」
代わって答えたのは、敬太郎とタボだ。
「そっかあ」
なんだか急に気がぬけて、このちゃんはへたりとパイプ椅子に腰をしずめた。
「あたしも、百まで生きるのやめよっかな」
「え、松原まで？」
敬太郎が目を丸くする。
「松原は、なにがあっても落ちこまないと思ってた」
「そんなあ。っていうか、敬太郎くんたちは平気なの？」
「ぼくたちがまわった部屋は、わりと元気な人が多かったんだ。みんな自分でジュース飲めたし」
「あ、そうなんだ」
どうやら、ここに入居している全員が弱りきっているわけではないらしい。
少しほっとしたこのちゃんの横で、「ずるいよね」と、ゆうかが声をとがらせた。
「男子だけ、らくな仕事しちゃって」
「そう言われたって、決めたの中宮さんだし。それに、ぼくがまわった部屋だって、認知症の人とかはいっぱいいたよ。孫に会いたいって泣いてる人もいた」
「かわいそうって思わないの？」
「思うよ、もちろん。家族はなにしてるんだろうって思う。でも、それでもここにいる人たちは、こういうところに入るお金があるだけ、まだ恵まれてるんじゃないのかな」
「っていうかさ、どんなふうでも、長生きしてるってことは、いいことなんだよ」
タボが横から口をはさむと、ゆうかはますますむきになった。
「そんなことない。あんなふうに生きてるなら、あたしは死んだほうがマシ」
「それは、まだとうぶん死なないって自信があるからじゃないの」
「だから、死ぬのはいいけど、老人になるのがいやなのっ」
敬太郎とタボがこまった顔をするのを見て、このちゃんは自分がチームリーダーであるのを思いだした。
「ゆうかちゃん、とりあえずいまは、自分の老後より、ここにいる人たちのことを考えよう。みんな、いやでも年をとっちゃったんだから、しょうがないよ。あたしたちが暗い顔してたら、みんなも暗い気持ちになっちゃうし、②ちょっとむりしても、最後まで笑ってよう。ね」
から元気をふりしぼり、「ファイト！」とこぶしを突きあげる。
ファイト！　と、バスケ部の仲間たちなら返してくれるはずだった。
が、ゆうかはぽたんとテーブルに顔をふして言った。
「その体育会系のノリ、あたしはむり」

「あなた、おいくつ？　こんなところに来たって、おもしろくないでしょう。たいくつでしょう」
「十三歳です。あの、学校の体験学習なんですけど、たいくつじゃないです。いろいろ、勉強になります」
「十三歳なんて、いいわねぇ。いまの子は、なんでももっていて。楽しいことがたくさんあるでしょう」
「はい。でも、あたしはスマホ、もってないんです」
「あら、スマホ？　わたしは見たこともないわねぇ」
「えー、ほんとに？」
「じゃあ、あなた、マナヅルは？」
「マナヅル？」
「あなた見たことある？　美しいのよ、それはそれは。わたしの故郷はマナヅルの[d]越冬地でね、毎年、冬になると飛んできたの。マナヅルがね、こう、ばさーっと翼を広げて飛ぶ姿……思いだすと、涙が出ちゃう。美しいのよ」

「いいなあ。あたしも見てみたい」
「いくらでも見られるわよ。十三歳だもの」
チームSの最後の仕事は、「話し相手」だった。二階のカフェテリアでくつろいでいるお年よりたちとの交流。このちゃんに声をかけてくれたのは、どこかかわいらしい上品なおばあさんで、のんびりと言葉を交わしているうちに、このちゃんはゆうかの一撃によるダメージからじょじょに立ちなおっていった。
「おばあちゃんは、いま、おいくつですか」
「ええっと、八十六になるかしら」
「わあ、すごい」
「どうして？　だれでも生きていれば年なんてとるものよ」
「でも、八十六年も生きるなんて、すごいです。あたし、十三年目でも、ときどき疲れちゃうから」
「あら、ま、どうして？」
おばあさんが灰色の眉をよせる。
いけない。このちゃんはあわててテッカイした。
「うそ、うそ。あたし、ぜんぜん疲れません。毎日、すっごく楽しいです」
安心してもらおうと力をこめたのに、なぜだか、おばあさんはさびしげな目をしておしだまった。
「ゆうかちゃん、待って！」
千鶴のさけび声がしたのは、そのときだ。
ハッとふりむいたこのちゃんの目に、泣きながら廊下へ飛びだしていくゆうかの姿が映った。そのすぐあとを千鶴が追っていく。
ふたりがカフェテリアから去ったのを見て、とっさにこのちゃんも腰をうかした。
「すみません。ちょっと……」
一瞬、見失ったふたりを見つけたのは、二階の女子トイレだった。洗面台にしなだれかかって泣いているゆうかをなだめるように、千鶴が背なかをさすってやっていた。
「ゆうかちゃん、だいじょうぶ？　どうしたの」
なにを聞いても、ゆうかはただただしゃくりあげるばかり。
代わりに横から千鶴が答えた。
「おばあちゃんと、ゆうかちゃんと、わたしと、三人で話してたの。そしたら、急にゆうかちゃんが泣きだして」
「理由もなく？」
「理由は、その……最初ね、おばあちゃんがゆうかちゃんに言ったの。なやみがあるなら話してちょうだい、って。なんでかわなんないけど、ゆうかちゃんにだけ。そしたら、ゆうかちゃんが……」
ちらりとゆうかをうかがい、千鶴が声を落とす。
「人間を信じるのがむずかしい、って」
このちゃんはどきっとした。
人間を信じるのがむずかしい。ゆうかがそんなことを考えていたなんて。
「そしたらね、おばあちゃんが言ったの。簡単だよ、って。人をゆるすことに上手になればいい、そしたら信じることもらくになるよ、って。わたしはよくわかんなかったんだけど、それを聞いたら、ゆうかちゃんが急に泣きだして……」
千鶴がまたゆうかをチラ見する。
「なんとなくだけど、たぶん、美奈ちゃんのこと」
「美奈ちゃん？」
「思いだしたんじゃないかな。ゆうかちゃん、ずっと気にしてたから」
「え」
「ひどいこと言っちゃったって」
その声にあおられたように、ゆうかが一段と鳴き声のボリュームをあげる。
そういえば、とこのちゃんは思った。このところ、ゆうかと美奈がいっしょにいるのを見かけない。代わりに、ゆうかはいつも千鶴たちのグループといる。ふたりになにかあったのか。
気になる。が、このちゃんにはカフェテリアにいる人たちのことも気になった。ボランティアとしてここにいる以上、いまは自分たちの問題よりも、話し相手としての役目をはたすこと、少しでもお年よりたちをはげますことを考えなきゃいけないのでは、と。
「ゆうかちゃん」
そこで、体育会系のノリにならないよう、声のトーンに気をつけながら言った。
「このことは学校にもどってから、ゆっくり話さない？　きっと、まこちゃんも相談にのってくれるよ。とりあえず、いまはカフェテリアにもどろう。ね、おばあちゃんたち、心配してるよ」
またはねつけられるのか。内心びくびくしていたものの、ゆうかはすんなりとうなずいた。
「うん。わかった」
洗面台の鏡ごしに、ゆうかの赤い目と目が合う。
「このちゃん。さっきはごめんね。やなこと言っちゃって」
「え？　ううん、ぜんぜん」
「あたし、チームSでよかったって、いまは思う。あのおばあちゃんに会えたから」

ぽろり。言いながらまたほおに涙を伝わせる。

ゆうかちゃんって、いろんな意味で、すなおな子なんだな……。いつも素通りしていた家にはじめて上がったみたいに、③このちゃんはこのとき、ゆうかという子の奥の部屋まではじめて足をふみいれた思いがした。おなじクラスにいても、気づかなかったこと。毎日、教室で顔を合わせつづけた八カ月よりも、今日一日の発見のほうが大きかった気がする。

さらなる「気づき」がもたらされたのは、ゆうかがトイレットペーパーで鼻をかむのを待って、いっしょにカフェテリアへもどってからだった。

「あら、ほら、もどってきたよ」

「よかった、よかった」

三人の帰りを待っていた車椅子のおばあさんたちが、ゆうかをかこんで、いっせいにしゃべりだしたのだ。

「悲しくなっちゃったの？　かわいそうに。かわいいお目々が真っ赤だよ」

「ごめんねぇ。おばあちゃんが、悪い話をしちゃったのかねぇ」

「十三歳なんて、一等、感受性が強い年ごろなんだよ。あたしらにもあったっけねえ、そんな年のころが」

「ジュース飲む？　おばあちゃんのアメなめるかい？」

このちゃんがふいをつかれたのは、口々にゆうかをはげますおばあさんたちが、どこか生き生きとして見えたことだ。涙もろい女の子を心配しながらも、その声にはよゆうとハリがあった。さっきマナヅルの話をしてくれたおばあさんも、にこにこと C目じりをたらしてゆうかの手をさすっている。

あ、そっか。

老人たちのまんなかではにかむゆうかを前に、この日、④はじめてこのちゃんの顔から笑みが消えた。

だれだって、はげまされるよりは、はげましたいんだ……。

（森絵都「プラタナスの葉が落ちるころ」『クラスメイツ〈後期〉』による。）

問一　傍線部a～eのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二　傍線部A～Cはそれぞれどのような意味か、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A「腰が引けていた」
イ　状況の変化についていけなくなっていた
ロ　目の前のことから逃げ出したくなっていた
ハ　怖くて立っていられなくなっていた
ニ　驚きあきれてものが言えなくなっていた
ホ　積極的に振る舞うことができないでいた

B「眉をよせる」
イ　不快な気持ちでいっぱいになる
ロ　面倒な気持ちでいっぱいになる
ハ　視界がぼやけて見える
ニ　気持ちが集中できなくなる
ホ　心配でたまならくなる

C「目じりをたらして」
イ　とても不満そうな表情をして
ロ　怒りがおさまって表情をやわらげて
ハ　とても嬉しそうな表情で
ニ　細かいところに注意深くなって
ホ　涙がこぼれないようにして

問三　傍線部①「おなじような境遇」とあるが、それはどのような境遇か、三〇字以内で簡潔に説明せよ。

問四　傍線部②「ちょっとむりしても、最後まで笑ってよう」とあるが、「このちゃん」がそのように言う理由として適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

イ　身体的に過酷な状況でも、無理をして笑っていることで、少しでも身体を休ませることができると信じているから
ロ　心理的に辛い状況でも、無理をして笑っていることで、少しでも心を落ち着かせることができると信じているから
ハ　どんなに嫌いな相手でも、無理をして笑っていれば、相手は自分のことを好きになってくれると信じているから
ニ　どんなに近づきがたい相手でも、無理をして笑っていれば、関係がこじれてしまうようなことは避けられると信じているから
ホ　長生きしてる人に対しては、無理をして笑っていることが、最も有効なサポート方法だと信じているから。

問五　傍線部③「このちゃんはこのとき、ゆうかという子の奥の部屋まではじめて足をふみいれた思いがした」とあるが、「奥の部屋」という表現は、「ゆうか」の何をたとえたものか、一五字以内で簡潔に答えよ。

問六　傍線部④「はじめてこのちゃんの顔から笑みが消えた」とあるが、それはなぜか。最も適切なもの次の中からを一つ選び、記号で答えよ。

イ　おばあさんたちが「ゆうか」を励ます姿が生き生きとしていることに気づき、自分が笑顔でいることがおばあさんたちを励ますのだという信念が揺らいでしまったから。
ロ　おばあさんたちが「ゆうか」を励ます声に余裕とハリがあることに気づき、自分が笑顔でいなくても十分におばあさんたちは病気を克服しているのだと思ったから。
ハ　おばあさんたちが励ます「ゆうか」は、自分が無理をして笑っていることが苦しくて泣いているということに気づき、「ゆうか」の前では笑顔でいることができなくなったから。
ニ　おばあさんたちが励ます「ゆうか」は、おばあさんたちのようになりたくなくて泣いていると気づき、そのことに気づかないおばあさんたちの楽観さにあきれてしまったから。
ホ　おばあさんたちが励ます「ゆうか」はすなおな子であると気づき、無理に笑顔を作るような自分ではおばあさんたちを励ますことなどできないと思ったから。

二　次の文章を読み、後の問いに答えよ。

かつて「科学と宗教の対話」という場に招かれ、チベットのダライ・ラマ法王と対話する機会を得たが、この場で、法王は、いつもの様にユーモアに溢れた表情で、何度も「慈悲」の大切さを語っていた。

この「慈悲」という言葉は「博愛」や「利他」という言葉とともに、世界中で、多くの宗教者によって語られてきた言葉である。

しかし、宗教数千年の歴史において、こうした言葉が語り続けられてきたにもかかわらず、現実の世界は、いまだ、政治も、経済も、社会も、その[a]タイキョクの「利己的な衝動」によって動かされている。

その根本的な理由は、我々の心の中に「自己中心的なエゴ」が存在し、それが、しばしば、目の前の損得に振り回され、「利己的」に動くからである。

この「エゴ」は、どれほど強く「エゴを捨てよう」と思っても、それで消えていくほど生易しいものではない。それは、ときに、慈善事業や社会貢献に関わるときでさえ、「[b]キョエイ」や「偽善」の心として密やかに忍び込んでくる、厄介なものである。

では、この「人間のエゴ」があるかぎり、社会において、真に「慈悲」や「博愛」や「利他」の精神を広げていくことは、不可能なのであろうか。

その問いへの一つの答えを示しているのが、フランスの思想家、ジャック・アタリが語る「合理的利他主義」の思想であろう。

これは、我々が「利他的」な行動を取るべきなのは、「自己犠牲」の精神からではなく、その行動が、自分にとっての「利益」になるからであり、「幸せ」に繋がるからである、との思想である。

例えば、親が子供を献身的に育てるのは、それが「生き甲斐」や「喜び」に繋がるからであり、困っている隣人を助けるのは、そうした助け合いの文化が、自分にとっての「安心」に繋がるからである。

また、我々が、地球温暖化の解決に取り組み、未来に安全で快適な環境を残そうとするのは、未来の世代が希望を持って生きられることが、現在の世代の将来にとっても有益だからである。

もとより、筆者は、人間が本性として持つ「慈悲の心」や「博愛の精神」を信じる人間であるが、このアタリの「合理的利他主義」の思想は、ただ素朴に「犠牲的精神」を鼓舞し、「[c]ショクを捨てよ」と唱える思想に比べるならば、人間の本源的な［　A　］に処するための、より深い、賢明な思想であろう。

そして、この思想に基づくならば、近視眼的思考で「破壊的な利己主義」に走る人間は、「慈悲」や「博愛」や「利他」の精神が欠如しているのではなく、むしろ、「何が自分にとって本当の利益となるのか」「何が本当に自分の幸福に繋がるのか」を正しく理解する「知性」が欠如していると言える。

では、二一世紀の世界において、多くの人々が、この「合理的利他主義」を身につけていくためには、どうすれば良いのか。

その一つの道は、やはり、「教育」と「[d]啓蒙」であろう。すなわち、近視眼的思考による「破壊的な利己主義」が、どのような結果をもたらすのかを、科学的理論や客観的事実、合理的説明によって、多くの人々が理解するようにしていくことである。

例えば、二〇〇七年のノーベル平和賞受賞者である、元米国副大統領のアル・ゴアが、著書と映画『不都合な真実』で行おうとしたことは、地球温暖化の引き起こす危機についての、教育と啓蒙であった。

しかし、人々が［　B　］を身につけるためには、もう一つ、忘れてはならない道がある。

それは、それぞれの国に古くから存在する「[e]叡智の文化」に、光を当てることである。

例えば、この日本においては、昔から、困っている誰かを助け、お礼を言われたとき、「お互い様です」と答える文化があった。また、この国では、「情けは人のためならず」という言葉も語られてきた。

これは「他人を助けることが、自分のためにもなる」との教えを伝える「叡智の言葉」に他ならない。

すなわち、アタリの語る「合理的利他主義」は、決して新しい思想ではない。どの国にも「他人の幸せを大切にすることこそが、自分の幸せに繋がる」という「叡智の言葉」が眠っている。

「叡智の文化」が存在したのである。それが、金融資本主義の「近視眼的な利己主義」の奔流の中で、しばし、見失われてきただけなのである。

されば、この国により良き社会を築くために、我々は、海の彼方ではなく、足下の大地をこそ見つめなければならない。そこには、日本的精神と呼ぶべき、深い「叡智の言葉」が眠っている。

自利は、利他なり。利他は、自利なり。

（田坂広志「深き思索、静かな気づき」による。）

問一　傍線部a～eのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二　［　A　］、［　B　］に入る言葉としてふさわしいものを、本文から抜き出して答えよ。

問三　傍線部「この国により良き社会を築くために、我々は、海の彼方ではなく、足下の大地をこそ見つめなければならない」とあるが、このことを説明した次の文の［　①　］～［　③　］に入るものとしてふさわしい言葉を考え、答えよ。

どの国にも「他人の幸せを大切にすることこそが、自分の幸せに繋がる」という「叡智の［　①　］」が存在している。他国の思想に学ぶのではなく、自国の文化に根付いている「叡智の言葉」を見直すことが、［　②　］な利己主義を克服し、［　③　］の幸福に繋がるより良き社会を築くことに繋がる。